

日本ブランド発信事業

ベラルーシ（ミンスク）／エストニア（タリン）にて
日本の伝統文化を未来につなげるデザイン手法について発信

2016 年 2 月

「日本ブランド発信事業」専門家
アーキテクト／プランナー 南木隆助

【出張目的】

今回、私は外務省の日本ブランド発信事業による派遣専門家として、2016 年 2 月 15 日～20 日の間、ベラルーシ ミンスク及びエストニア タリンを訪問し、私がこれまで関わった日本の伝統文化をテーマとしたプロジェクトの講演と、現地のデザイン関係者や美術関連の専門家との交流を行ないました。

ベラルーシ、エストニアともに日本ではそれほど知られてはいませんが、日本文化に対する関心が高い国であり、日本文化関連の展示も多く行われています。

そのため、私が現在企画中の和菓子の展覧会の開催につながるきっかけができればと考えていました。

【出張結果】

2 月 16 日（火）＜ベラルーシ ミンスク①＞

ミンスクの中心部にある、ミンスク市歴史博物館ホールにて学生向けのレクチャーを行いました。またレクチャーと共に、企画している和菓子の展覧会の模型とそのベースとなる昨年出版した書籍の展示、和菓子（干菓子）の試食を行ないました。出席者の多くがそれほど日本の文化に詳しくない中で、プロジェクトの話がどこまで理解してもらえるかなと思っていたのですが、実際には日本文化にも私が関わったプロジェクトの内容にも強い関心が見られました。参加いただいた学生が普段接する自国の伝統文化のプロジェクトと比べ、リサーチの細かさや、最終的な制作物のディテールへの精度の高さが参考になっているようでした。学生という事もあり、「プロジェクトを行なう上でなにが一番大切なのか」という質問が出るなど、単にレクチャーをするという立場であるとあると同時に自分が学生の時に考えていた事を思い出し、改めて自らの背筋も伸びるような思いでした。



2 月 16 日（火）＜ベラルーシ ミンスク②＞

第一回同様、ミンスク市歴史博物館ホールにて、デザイン関係者、美術関係者向けのレクチャーと展示、試食を行ないました。

学生と比べてプロジェクトのデザイン単体というよりも、日本文化を理解したい思いをより強く感じる事が出来ました。日本食への興味はもちろんですが、多くの方が

はじめて目にしたであろう和菓子への興味をより強く感じました。書籍で扱った 72 候という季節の切り取り方、お茶と共にあろうとする哲学、そしてその造形の美しさにレクチャーの途中にも関わらず歓声があがり、レクチャー後も多くの方から積極的に質問をいただくほどでした。市の図書館の方から「どうしてもこの本をこの市の図書館に寄贈して欲しい」と熱意をもってお願いされるなど、非常に光栄に感じました。こちらでも、日本文化を展示する事に対する高いポテンシャルを見いだす事が出来ました。



レクチャーの合間に、ベラルーシを代表する画家である M. サヴィツキー氏の美術館を訪れる機会を頂きました。サヴィツキー氏の作品からも、ベラルーシ人の歴史を誠意をもって全てさらけ出すという向き合い方は、日本の展覧会関係者にも非常に参考になるのではないかと感じました。ベラルーシ人が歴史に対する敬意を持っているからこそ、日本の伝統文化を扱う私のレクチャーに対して良い反応があったのではないかと感じます。そういった国に対して、日本の歴史や伝統文化に関する展示を行う事は非常に意義深いのではないかと深く感じました。

2月18日（火）〈エストニア タリン〉

エストニア、タリン市内のタリン応用科学大学の建築学科において、主に建築を学ぶ学生と日本に興味のある一般の方向けにレクチャーを行いました。日本に比べて、ヨーロッパの大学の建築学科では、広い表現方法やコンセプト構築という事よりも、むしろ狭い範囲で技術に寄った教育が行なわれています。それもあって、設計-コンテンツ制作-プロデュース…という広い範囲の役割を専門性を横断し雑食的に行なう自分のプロジェクトをどこまで面白いと思ってもらえるのだろうかと考えていたのですが、しっかりとした理解と興味を持ってもらえたようでした。ある学生は「建築のコンセプトで様々な事が出来るのだとわかった」という嬉しい感想をくれましたし、レクチャーが終わっても展示していた本を手取る人も多く、中には全ページを目に焼き付けるように読んでいる人もいました。質問も積極的にしてくれたのですが、モデレーターをご担当頂いた、タリン応用科学大学で教える林先生曰く「通常のレクチャーでエストニア人があんな風に質問をすることは少ないので多くの方が興味を持った証だと思う」とのことです。これは彼らが今まであまり触れた事がない日本の伝統文化に対する説明（日本料理のこと、魯山人のこと、日本の風物のこと、和菓子のこと、72候のこと）が興味深かったことが前提にありつつ、それをいかに現代の視点で解釈し、人に伝えるものを作るかというプロジェクトの内容にも二重の興味を持ってもらえた

のではないかと思います。タリンの市街地は世界遺産になっており、歴史的な町並みを守るための厳しい建設規制も存在します。そのため、学生に限らず実務者にとっても、レクチャーで私が伝えかった「伝統/歴史のコンテクストの本質を深く読む」と「コンテクストを活用して課題を解決する」ことの二つは避けて通れないはずです。そういった点が今回のよい感触につながったのではないかと思います。



レクチャーの前に、在エストニア日本大使館と林先生のアテンドにて、エストニアのデザイン協会のディレクターと実際にプロダクトをデザイン/制作するデザイナーと話す機会がありました。彼らはノルディックデザインに強いシンパシーを感じていると同時に、エストニアデザイン“らしさ”を模索していました。それをどこに求めるか、どう世界に対して伝えていくかというテーマは非常に面白さと可能性を感じました。今後日本でエストニアデザインを紹介する、何らかの仕事を作れないか、可能性を模索したいと思いました。

また、タリンデザインミュージアムの館長ともお話しする機会があり、和菓子の展覧会開催の可能性を打診したところ、タリンデザインミュージアムは他国のデザイン展も積極的に行なっているため、提案を受ける素地があるとの返事をもらいました。和菓子についても興味深いという良い感触でした。

【まとめ】

今回の何回かのレクチャーは、まだそれほど長いキャリアではない私にとって、自分の仕事を通じて二つの課題に向き合う非常に貴重な経験でした。

一つは海外の方に日本の伝統文化を論理的に伝えつつも、感覚的な部分を刺激できるかという課題。そしてもう一つは伝統文化を一部の愛好家のためのもではなく、今なお現代人が学ぶべきものであり、革新が起きているものとして伝えられるかという課題。どちらも普段の仕事で向き合う課題と同じものだと言えます。それを自分の仕事で、自分の口を通じて行ない、その場で反応を見ながら出来るというのはとても良い経験になりました。同時に、現在海外での展覧会を模索しているプロジェクトをどう伝えれば良いかというヒントや、実際に展覧会を行なうにあたってのつながりを得ることが出来ました。今回頂いた機会を活かし、次につなげていければと考えております。最後になりますが、今回このような貴重な機会を頂き、外務省の方々、現地大使館の方々、各地でお世話になった皆様方に深い御礼を申し上げて、レポートを終えさせていただきます。ありがとうございました。

【参考リンク】

[外務省「日本ブランド発信事業」ウェブサイト](#)